

未来のカギを握る大陸、アフリカ

もう今から50年近く前のことです。当時、本学風土病研究所に勤務していた父親が、初めてのアフリカ長期滞在から帰還し、滞在中に撮りためたスライドの映写会を自分たち家族のために催してくれました。幻灯機で写しだされたサバンナやそこに生きる野性の動物たちの映像は、まだ中学生であった自分には新鮮な衝撃で、その残影が今でも脳裏に残っています。

ほどなく、風土病研究所は熱帯医学研究所(熱研)へと改称しましたが、その頃から熱研には、熱帯への熱い志を有する異才たちが全国から集結するようになりました。都会の雑踏よりもジャングルの鬱蒼を、フカフカのベッドよりも星空の下の草原を好むといった面々です。そして、彼らに加えて長崎大学病院各科の医師たちが、途切れることなくアフリカ、特にケニアに赴き、住み、研究や診療に情熱を傾けました。

2005年、長年培った信頼関係と経

験を基盤に、熱研は待望の常駐型研究拠点をナイロビに創設しました。ケニア拠点はいまや10名近い熱研スタッフと100名を超える現地スタッフを擁する一大拠点に成長しました。そして、今その中心には昔と変わらぬ情熱を燃やすパイオニアたちがいるのです。

現代世界の矛盾のしわ寄せが集中するアフリカ、近未来の人類と地球の持続的発展のカギを握ることになるアフリカ。その一隅で存在感を発揮し始めた熱研ケニア拠点を基盤に、長崎大学はアフリカでの活動の幅と規模を一気に拡大したいと思います。

2010年春、拠点の視察をかねて初めてアフリカの地を訪れる機会を得ました。そこには、昔スライドの映像によって刻まれた記憶と寸分たがわぬ自然が広がっていました。星降る夜空を見上げながら、現代世界が直面する困難を突破する新しい価値観はこの環境の中から生まれる、そんな予感を抱いたのです。



長崎大学長 片峰 茂

CONTENTS

長崎大学広報誌
[チョーホー]
Choho Vol.41

本誌記事を長崎大学関係者が転載する場合は、「長崎大学広報Choho〇号から」と明記してください。学外の方は、事前に広報戦略本部までご連絡願います。

学長だより	1
特集 今、熱い！ 長崎大学とケニア	2
トピックス 長崎大水害30年を迎えて	15
グラバー図譜「バショウカジキ」	19
Information 長大祭ほか	21
長崎大学「通」クイズ	22
編集後記	22

表紙のはなし



ケニアにある長崎大学のピタフィールドステーションのスタッフたち。近所の子どもたちが集まってきたので協力してもらい「ジャンボ・ブアナ」という、ケニアではおなじみのお客さんを迎える歌をみんなで歌いながら撮影しました